

# Historical Studies on `kuchiohi' as a Japanese Gesture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3792">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3792</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 「しぐさ」についての史的考察 —クチオホヒ（口覆）の場合—

## Historical Studies on 'kuchiohi(口覆ひ)' as a Japanese Gesture

吉田光浩

### はじめに

それぞれの社会・文化には、いくつかの「しぐさ」と呼ばれる概念化された所作が観察される。それらは、必ずしもコミュニケーションの意図をもつものとは限らないが、その所作をとる（あるいはとらない）ことが、それぞれの社会・文化の中で、おのずとある一定の表現効果をもたらしていることがある。ここでは、そのようなしぐさのうち、日本の古典に見出される「口おほひ」について、中古の例をもとに検討しておくことにする。

なお、調査対象は日本古典文学大系中の中古資料とする。また、文中に引用する用例は、『源氏物語』については日本古典文学全集本（小学館）を、またそれ以外の資料については日本古典文学大系本（岩波書店）を用いるが、表記については読解の便を考慮して、適宜改めたところがある。

### —

クチオホヒについては、『角川古語大辞典』において、次のように記述されている。

口を手・扇・袖などでおおい隠すこと。あきれ・驚き・滑稽さ・恐れなどの強い感情の表明を抑えるときにするしぐさ。特に女の場合は、慎み、みだしなみ、男に対する恥じらいのさまを表す。（後略）

『角川古語大辞典』

「強い感情の表明を抑える」場合には、そのしぐさに伝達を抑制する意図が読み取れるのであるが、「慎しみ、みだしなみ」あるいは異性に対する「恥

じらい」の場合には、伝達を積極的に抑制する意図が読み取れないことが普通である。また、異性に対する「恥じらい」の場合には、他者（異性）の視線への意識が前提となるが、「慎しみ、みだしなみ」の場合では、必ずしもその意識に前提されない。したがって、上記の記述では、「口おほひ」の所作について、伝達抑制の意図の有無、他者の視線への意識の有無をめぐって三つの場合が示されているものと言える。

また、ここに見えるように「口おほひ」の所作は、手・袖・扇などを用いて口元を覆い隠す所作であるが、次の例のような「扇をさし隠す」で示される扇で口元あるいは顔全体を覆い隠す様を表すしぐさと、所作として部分的に重なっており、その用例も多数見受けられる。

そこの女房えもいはぬなり装束にて、えならぬ織ものの唐衣を著、おどろ〜しき大海の摺裳どもを引き掛け渡して、扇どもをさし隠し、うち群れ〜居ては、何事にかあらん、うち言ひつつささめき笑ふも、恥しきまで思ほされて、〜

（栄花物語 卷第八 はつはな）

また、この「扇をさし隠す」所作については、同じ『栄花物語』の万寿二年正月皇太后妍子大饗の折の記事のうちに、次のような記述も見受けられる。

おほやけ人やがて几帳さし、又行きて道払ひなどして、参る程、衣の裾などとらせて参るを見れば、扇もえさし隠さず、衣のこちたく厚ければ、たをやかなる気もなし。

（栄花物語 卷第二四 わかばえ）

大饗に参る女房達は、互いに華美な衣装を競い合い、ある者は着重ねて自由に動くこともできないありさまである。この例では、「扇もえさし隠さず」の記述の裡に、通常は「扇をさし隠す」所作をとるべきところであったが、という意が含まれており、身につけた衣装のために、この所作をとることができない女房の様子が描かれている。したがって、この記述から、扇で口元あるいは顔をおおい隠す所作は、当時の女性が人目に付く場で通常とるべき、いわばみだしなみの所作であったことが理解される。

このように、「扇をさし隠す」しぐさは、女性の所作として多く描かれているのであるが、以下の例のように、男性による所作の例もまれに散見される。

（世継）「〜されば、おいたるは、いとかしこきものに侍り。わかき人たち、なあなづりそ」とて、くろがへのほね丸あるに黄なる紙はりたるあ

ふぎをさしかくして、気色だちわらふほども、さすがにをかし。

(大鏡 序)

一九〇歳の太政大臣世継が周囲の人々に「(老人を) なあなづりそ」と語り、笑う場面である。「気色だちわらふほども、さすがにをかし」とあるように、わざと演技めいた所作を作る例と受け止められるのである。

これと同様に男性が口元を扇で隠す所作としては、例えば、以下の『枕草子』に見える一場面を挙げることができる。ここでは、蔵人の五位と呼ばれる貴族の、扇を広げて口にあてる所作が描かれている。

ひさしうあはざりつる人のまうであひたる、めづらしがりて、ちかうみより、物いひうなづき、をかしきことなどかたり出でて、扇ひろうひろげて、口にあててわらひ、～

(枕草子 第三三段 説経の講師は顔よき)

説経の会場で、やはり聴聞に訪れた顔見知りになつき、場慣れた様子で振る舞う蔵人の五位の様子を描写した場面である。この箇所の後には「この説経の事はききも入れず」とあり、肝心の説経はそっちのけで、扇をかざして口元にあて、知人と談笑する男の様子が描かれている。また、この記述の後には、この人物とは対照的に聴聞の席でゆかしく振る舞う貴人の様子が語りだされており、この蔵人の五位は、説経の場で訳知り顔にふるまう者として批判的に描かれている。

以上のように、「口おほひ」の所作は、通例貴族女性の扇で口元を隠す身だしなみのしぐさとして記述されることが多いのであるが、上記のように男性が笑う時にとる所作としても、中古の和文資料から見出すことが可能である。

## 二

「口おほひ」の所作は、上記のように「扇をさし隠す」という表現で示される場合も多いのであるが、この表現では顔全体を隠す場合も含まれており、必ずしも口元を覆う所作と一致しない<sup>(注1)</sup>。「口おほひ」の所作そのものを直接表す語としては、用例は多く現れないものの、複合動詞クチオホフあるいはその転成名詞クチオホヒを挙げることができる<sup>(注2)</sup>。したがって、以下においては、動詞クチオホフとその転成名詞クチオホヒの例を挙げながら、そ

の具体をみてゆくことにする。

例えば、次例は、女性同士のうちとけた場面でのクチオホヒの例である。  
 (空蟬ハ) たとしへなくくちおほひてさやかにも見せねど、(源氏ガ) 目  
 をしつとつけたまへれば、おのづから側目に見ゆ。目少しはれたる心地  
 して、鼻などもあざやかなる所なうねびれて、にははしき所も見えず。  
 言ひ立つればわるきによれる容貌を、いといたうもてつけて、このまさ  
 れる人よりは心あらむと目とどめつべきさましたり。

(源氏物語 うつせみ)

源氏が、空蟬と軒端萩の碁を打つ姿を垣間見る場面である。この箇所の後には「かくうちとけたる人のありさま」とあり、この記述から二人は源氏の視線に気づいておらず、いわばくつろいだ場面でのクチオホヒであることが諒解される。したがって異性あるいは他者の視線を意識したしぐさではない。また、その様子の具体は、引用箇所の直前に「顔などは、さし向ひたらむ人などにもわざと見ゆまじうもてなしたり」と描写されている。空蟬は「さし向ひたらむ人(軒端萩)」の継母であり、義理の親子である。誰の視線も気にせず受領階層のふたりの女性が仲良く碁を打ち合う場面であるが、空蟬は義理の娘の軒端萩にも見られないように、袖で口を覆っているのである。「たとしへなく」とあるところからも、口元だけではなく、顔全体を覆わんばかりにしている様子である。空蟬という女君の個性にもよるのであるが、必ずしも異性の視線を気にして恥じらうクチオホヒではなく、無意識のうちのみだしなみの所作であることが読み取れる。

### 三

一方、異性あるいは他者の視線を意識する例として、『堤中納言物語』では、次のように接頭辞ウチを伴うウチクチオホフの例が見られる。

男、「いととくも疎み給ふかな」とて、簾をかき上げて入りぬれば、畳紙をかくして、おろ〜にならして、うちくちおほひて、夕まぐれにしたたりと思ひて、まだらにおよび形につけて、目のきろ〜としてまたたきむたり。

(堤中納言物語 はいずみ)

せっかちな夫が急に訪れたため、あわてた妻は、白粉と間違えて、顔にはい

ずみを塗りたくって対面してしまい、夫に愛想を尽かされる。その対面の場面での口おほひである。この物語では、「口おほひ」を示す例として、このウチクチオホフ一例のみ認められるが、この箇所「口おほひ」は、化粧が十分にできていないこともあり、単なるみだしなみとしての所作ではなく、突然訪れた夫の視線を意識する恥じらいの所作であると考えられる。

これと同様に夫や男君の視線を意識してこの所作をとる例としては、次の『源氏物語』の二例をあげることができる。

(末摘花ハ) いたう恥ぢらひて、口おほひしたまへるさへ、ひなび古めかしう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もちおほえて、さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすずろびたり。

(源氏物語 すゑつむ花)

(源氏)「今年だに声すこし聞かせたまへかし。待たるものはさしおかれて、御気色のあらたまらむなむゆかしき」とのたまへば、(末摘花)「さへづる春は」とからうじてわななかしいでたり。(源氏)「さりや。年経ぬるしるしよ」と、うち笑ひたまひて、(源氏)「夢かとぞ見る」とうち誦じて出でたまふを、見送りて、添ひ臥したまへり。口おほひの側目より、なほ、かの末摘花、いとほひやかにさし出でたり。見苦しのわざやと思さる。

(源氏物語 すゑつむ花)

これら末摘花のクチオホヒの例は、「いたう恥ぢらひて」また「からうじてわななかしいでたり」とそれぞれあるように、先に挙げた空蟬の例とは異なって、いずれも男君(源氏)の視線を意識し、恥じらう女性の所作であるととらえられる。『源氏物語』にはクチオホフ(ヒ)が五例みられるが、そのうち、引っ込み思案の女性として描かれている末摘花のしぐさとして二例が用いられている。

#### 四

一方、伝達を抑制する意図が読み取れるものとしては、次のような和歌の詠みかけと「口おほひ」の所作を組み合わせた場合が見られる。

木工の君、御薫物しつつ、「独りゐてこがるる胸の苦しきに思ひあまれる炎とぞ見しなごりなき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにや

は」と、口おほひてゐたる、まみいといたし。されど、(髭黒ハ) いかなる心にてかやうの人にものを言ひけん、などのみぞおほえたまひける。情なきことよ。

(源氏物語 まきばしら)

髭黒は、物の怪に取りつかれる北の方を残して玉鬘のもとへ出かける身づくろいをする。その様子を見て侍女木工の君が、北の方に同情する歌を髭黒に詠みかける場面である。木工の君については、この場面に先立つ箇所「御召人だちて、仕うまつり馴れたる木工の君、中將のおもとなどいふ人々だに、ほどにつけつつ、安からずつらしと思ひきこえたるを」という記述も見られるところから、この歌は北の方への同情だけではなく木工の君自身の心情も込められていることがわかる。したがって、この場面での口おほひは、差し出がましい和歌を詠みかけ、それを抑制するしぐさであると考えられる。日本古典文学全集本頭注には「自分の発言を越権行為と反省して口を覆うのだが、ここではあえてそれを侵しているとよまれよう」と解されている。すなわち、越権行為となる本心を歌に託して詠みかけ、「口おほひ」で抑制する、女君から男君への表現上のストラテジーとしてこの所作が用いられていると言える。

これに類似するものとしては、次の紫の君の例をあげることができる。

(紫の君は) 愛敬こぼるるやうにて、おはしながらとくも渡りたまはぬ、なまうらめしかりければ、例ならず背きたまへるなるべし、端の方について、(源氏)「こちや」とのたまへどおどろかず、(紫)「入りぬる磯の」と口ずさみて、口おほひしたまへるさま、いみじうざれてうつくし。

(源氏物語 もみぢの賀)

邸内にいるはずの源氏は、なかなか紫の君のところには訪れない。ようやく現れた源氏に紫の君は、恨み言を歌に託して読みかけ、「口おほひ」をするのである。玉上琢弥(1965)『源氏物語評釈』(角川書店)では、この箇所について次のように解説されている。

「入りぬる磯の、と口すさびて、口おほひしたまへるさま」それを作者は「いみじうざれてうつくし」と批評している。これは一歩間違えば下品になってしまう態度であるが、幼い姫君が見よう見まねでなさるところに愛敬もあり可愛らしさもあるのだろう。

すなわち、男君に恨み言の歌を詠みかけて、それを抑制するために「口おほ

ひ」の所作をとるのである。これは、先の木工の君の例のように、成人女性による一種のストラテジーとして用いられているが、成人に達していない紫の君が、それをやってのける姿を、語り手は「いみじうざれてうつくし」と評しているのである<sup>(注3)</sup>。ここに見られる和歌の詠みかけに組み合わせた「口おほひ」は、空蟬や末摘花の例に見られるような場合とは異なり、女君自らの本心の伝達を抑制することによって、むしろそれを際どく男君に伝えるものとなっている。いわば、女君の男君に対する積極的な態度の結果、生じたしぐさであると考えられる。

## おわりに

中古における口おほひの所作は、前述の『枕草子』『大鏡』の例にあるように男性が談笑する場合にも見られるのであるが、基本的には女性の所作として表れる場合が多く、そこには、①他者の視線を意識した「恥じらい」の場合、②他者の視線に対する意識に前提されない「みだしなみ」の場合、③積極的な伝達を抑制しようとする意図が認められる場合の三つのケースが観察される。とりわけ、③に該当する和歌の詠みかけとの組み合わせの例では、この所作を夫や男君に女君自身の本心を伝えるための一種のストラテジーとして用いている場合がある。したがって、この所作のおおむねの主体は、成人女性であるが、例外的には成人に至らない紫の君の「入りぬる磯の」の例も見受けられる。この場合はむしろ、少女が、あたかも一人前の女性のように振舞って口おほひをして見せるところにその場面の面白さが語りだされているといえるであろう。

(注1) 例えば、『かげろふ日記』には、石清水の臨時の祭りの折に、夫兼家が、日頃自らの行状からばつが悪くなり、「ふと扇をさし隠して」作者の車の前を通り過ぎる場面が見られる。これは、顔をそむける所作であり、口元だけではなく顔全体を扇で覆う様を指すものと推定される。

(注2) クチオホフの例は多くを拾えるわけではない。管見の限りでは、複合語クチオホフおよび名詞形クチオホヒの例は、中古中世の散文資料において、『源氏物語』に五例、『今昔物語集』に「口覆」



の表記で四例、『かげろふ日記』に一例、『紫式部日記』一例、『中納言物語』一例、『宇治拾遺物語』二例、『沙石集』一例、『太平記』一例に留まる。

- (注3) 子どもの口おほひの例として、『かげろふ日記』に「あな寒。雪はづかしき霜かな」と口おほひしつつ、かかる身を頼むべかめる人どものうちきこえごち、ただならずなんおほえける。」(かげろふ日記 天禄二年十月)の記述が見えるが、これは、寒さのために思わず口を覆う例と考えられるため、ひとまず本稿で扱う「口おほひ」の対象の外に措くこととする。